

Jumpa Lagi Kg Chapu!

ジュンパ ラギ カンポン チャプ

また会おうね チャプ村



財団法人鹿児島県国際交流協会
鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
青年海外協力隊鹿児島県OB会

はじめに

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

会長 安 楽 大

(青年海外協力隊鹿児島県OB会会長)

鹿児島県青少年国際協力体験事業は、今回で13回目を迎え、ここに報告書「Jumpa Lagi^{ジュンパ ラギ} Kg.Chapu!^{カンボン チャプ} (意味: また会おうね、チャプ村!))を取りまとめました。

この事業は、青少年を開発途上国に派遣し、訪問国の人々とのホームステイ等を通じた交流と国際協力活動を行っている青年海外協力隊の活動現場の体験を通して、国際交流、国際協力に対する理解を深め、国際性豊かな青少年の育成を目的としています。

今回は、鹿児島市、国分市、枕崎市との共催で実施しました。9名の団員(全員高校生)と同行者4名(うちマスコミ1名)が、平成16年7月19日(月)~26日(月)、マレーシアのトレンガヌ州、首都クアラルンプール、そしてマラッカ市を訪問しました。

マレーシアは、主にマレー系、中国系、インド系で成る多民族国家で、宗教もイスラム教を始め、仏教、ヒンドゥー教、キリスト教などです。人種も宗教も違う民族がそれぞれを尊重しあい、バランスよく成り立っている国です。島国で単一民族国家の中に育った日本人には理解しがたいものがあります。また、マレーシアは開発途上国の中の一つと位置づけられていますが、実際は、著しい経済成長を見せ、2020年までには先進国入りを果たそうと「WAWASAN2020」という経済社会開発計画を掲げ、東南アジア諸国の中でも最も目を見張る国です。今回ホームステイを受け入れていただいたのは、マレーシア半島の東海岸に位置するイスラム色が色濃く残るトレンガヌ州。ここは、マレーシアの中でもまだまだ未開発の部分が多い地区で、いわば「数十年前の日本」のような生活が営まれています。現代の日常生活しか経験のない青少年にとっては何事も珍しく新鮮な感動の連続だったことでしょう。

さて、今回の訪問では、地元の方々との交流のみならず、青年海外協力隊の活動現場訪問や交流会において作業療法士、養護教師、障害者水泳の指導員、日本語教師、プログラムオフィサー、自動車整備士など、さまざまな分野で活動している8名の隊員の方々とお会いすることができました。これらの方々との出会いを通して、国際協力やボランティアについて考え、学ぶことができたことでしょう。

この事業に参加した高校生たちが、それぞれの貴重な体験を鹿児島のために、世界平和のために生かして欲しいと願っています。また、参加した青少年だけでなく、できるだけ多くの方々と新鮮な感動を共有することで、鹿児島の国際化に貢献できればと考えております。

最後に、この事業にご協力を賜りました多くの皆様に心より感謝申し上げます。

目 次

はじめに

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会 会長 安樂 大

ごあいさつ

鹿児島県総務部国際交流課長 松田 典久1

参加団員名簿2

マレーシアでのスケジュール3~12

~団員の記録文をもとに、日記風にお届けします~

帰国表敬訪問及び帰国報告会12~13

団員の感じたこと

「マレーシア体験で、考えたこと」 久 保 佑 允14

「ホームステイinカンボン・チャプ」 大 石 真 教15

「日本とマレーシアの文化の違い」 坂 元 公 枝16

「一生忘れない体験」 茅 野 瑞 穂17

「いつまでも優しさを感じられる私で」 山 口 美 穂18

「人生変えちゃう夏かもね」 児 玉 明 子19

「マレーシアを訪ねて」 川 畑 知 穂20

「日本とは違うマレーシアの発見」 木 佐 貫 かおる21

「私がミテ、カンジテ、エタモノ」 増 留 愛 香 音22

団長報告「マレーシア・チャプ村から夢の実現への出発」

(財)鹿児島県国際交流協会 専務理事 月野 健一23

同行者感想

「同行者の目から見て」 西 村 直 人24

「青少年国際協力体験事業に同行して」 村 岡 佐 世 子25

「9人の高校生へ」 内 田 直 之26

新聞記事（読賣新聞、南日本新聞、中国報）27~29

事業概要30

参考資料「鹿児島県青少年国際協力体験事業」実績31

第13回体験事業をふり返って

鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 事務局長 弓場 秋信32

ごあいさつ

鹿児島県総務部国際交流課長

松 田 典 久

平成16年度「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の御成功を心からお喜び申し上げます。

この体験事業は、青少年の皆さんを開発途上国へ派遣し、そこで国づくりに貢献している青年海外協力隊員の活動状況を直に体感するとともに、ホームステイ等により現地の方々と交流を行うことにより、国際協力・国際交流について理解を深めてもらい、国際性豊かな人材の育成を目的とした、全国でも画期的な事業です。

また、鹿児島県では、我が国の南の拠点として、「アジアに広がる国際交流ネットワークの形成」を目指し、「多様な国際交流の展開」及び「地域特性を生かした国際協力の促進」を推進しておりますが、この事業はその趣旨に添った意義ある事業であると思っております。

今回は、マレーシアを8日間の日程で訪問し、青年海外協力隊員の活動現場視察のほか、地域の高校生等との交流やホームステイを体験し、国際協力や国際交流に対する理解を深めることができたと思います。

また、マラッカ州では、「おはら祭りinマラッカ」というイベントにも参加し、おはら節を踊るなどして、鹿児島のPRに貢献していただきました。

事業終了後の表敬訪問や報告会では、出発前の緊張した皆さんとは異なり、この事業の体験を通じて、一回りも二回りもたくましく成長した皆さんを拝見でき、力強く感じました。

今回の貴重な体験を通じた感動を、ご家族や学校、あるいは地域の方々等多くの人に伝えていただくとともに、皆さんの今後の人生や社会生活に生かしていただきたいと考えております。そして、今後も国際交流等に関心を持ち続けていただき、将来、国際感覚を身につけた社会人になってほしいと願っております。

最後に、この事業を実施された鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会の各団体及び実施に当たり御支援・御協力いただきました国際協力機構並びに青年海外協力隊の皆様にご心から敬意を表しますとともに、皆様の今後ますますの御発展を祈念いたします。

第13回(平成16年度)「鹿児島青年国際協力体験事業」団員名簿

■団員

	氏名	性別	高校名	学年	年齢	共催市町
1	くぼ ゆう すけ 久保 佑 允	男	鹿児島第一高等学校	3	17	国分市
2	おお いし しん きょう 大石 真 教	男	鹿児島第一高等学校	2	17	国分市
3	さか もと ひろ え 坂 元 公 枝	女	鹿児島県立国分高等学校	1	15	国分市
4	かや の みず ほ 茅 野 瑞 穂	女	鹿児島県立枕崎高等学校	1	16	枕崎市
5	やま ぐち み ほ 山 口 美 穂	女	池田学園池田高等学校	1	15	鹿児島市
6	こ だま あき こ 児 玉 明 子	女	鹿児島県立甲南高等学校	2	17	鹿児島市
7	かわ ばた ち ほ 川 畑 知 穂	女	鹿児島県立開陽高等学校	2	17	実行委員会枠
8	き さ ぬき かおる 木佐貫 かおる	女	鹿児島市立鹿児島女子高等学校	2	16	実行委員会枠
9	ますどめ あ か ね 増留 愛 香 音	女	鹿児島県立鹿児島東高等学校	3	17	実行委員会枠

■同行者

	氏名	性別	所 属	
1	つき の けん いち 月野 健 一	男	団 長	(財)鹿児島県国際交流協会 専務理事
2	にし むら なお と 西村 直 人	男	副団長	曾於農業改良普及センター 畜産課 青年海外協力隊鹿児島県OB会(マレーシア/畜産)
3	むらおか さよ こ 村岡 佐世子	女	看護師	みんなの訪問看護リハステーション かぐや姫 青年海外協力隊鹿児島県OB会(エジプト/看護師)
4	うち だ なお ゆき 内田 直 之	男	報 道	株式会社 鹿児島讀賣テレビ(KYT) 報道制作局 報道制作部

スケジュール

日 時	時 間	内 容	宿 泊
7月19日 (月)	10:45 鹿児島空港 12:50 鹿児島発 16:40 ソウル発	結団式@国際線ターミナル1階Bラウンジ(11時～) KE786 14:20 ソウル着 KE671 22:20 クアラルンプール到着	ダイナスティ ホテル クアラルンプ ール泊
7月20日 (火)	8:00 ホテル出発 10:25 KLIA発 12:40 15:30	クアラルンプール空港(KLIA)へ MH1326 11:10 クアラトレンガヌ空港着 ステイ先のChapu村へ(約1時間半) ホストファミリーとの対面式&村人との昼食会 Lemang/Bubu & Tangguk(伝統舞踊)の披露	ホームステイ チャプ村
7月21日 (水)	8:30 10:00 13:00 16:00	青年海外協力隊員活動視察 PDK Marang(養護学校)見学 来間 寿史 隊員(作業療法士) Bukit Busar小学校(養護学級)見学 伊藤 愛 隊員(養護) 協力隊員との昼食会(Batu Buruk Resort) Chapu村の学校で手作り運動会	ホームステイ チャプ村
7月22日 (木)	8:30 午後	Matang高校訪問 ・地域の高校生との交流活動 地域幼稚園訪問 ・地域の幼稚園での協力活動 ケニール湖見学 マレー系結婚式の模擬体験	ホームステイ チャプ村
7月23日 (金)	午前中 15:30	バティック工場見学 ホストファミリーや村の人々とお別れ会 ・出し物の披露 ・村の方々の出し物鑑賞	ホームステイ チャプ村
7月24日 (土)	8:30 Chapu村出発 11:45 クアラ トレンガヌ発 13:30~16:30 17:30~19:00	ホストファミリーとお別れ 空港へ MH1327 12:35 クアラルンプール空港着 マラッカへ移動 おはら祭り in マラッカに参加 (ハントア通り)	センチュリー マコタホテル マラッカ泊
7月25日 (日)	9:00 ホテル出発 11:00 19:00 フェデラル ホテル 23:50 KLIA発	マラッカ市内観光 クアラルンプールへ クアラルンプール到着後、市内観光 JICA・JOCV関係者、県人会の方との懇親会(夕食会) クアラルンプール空港へ KE672 翌朝7:20 ソウル着	機内泊
7月26日 (月)	10:00 ソウル発	KE785 11:30 鹿児島空港着 解団式:国際線ターミナル到着ロビー	

*JICA・・・独立行政法人国際協力機構 / JOCV・・・青年海外協力隊

6月19土 • 7月3土 ▶ 4日

事前研修



サイフルさん(左)とカイリルさんによるマレーシアダンスの指導

6月19日、初のメンバー顔合わせ。初めて会う顔に緊張の色を見せながらも2回目の研修が終わる頃には、すっかり…。マレーシア出発に向けて、マレーシアからの留学生、カイリルさんとサイフルさんとマレー語の勉強。「Saya tak faham(サヤ タツ ファハム)」「(わからないよ～)こんなんで大丈夫かなあ～。

7月19月

結団式 & 出発



あっという間に出発当日。結団式では練習を兼ねて、お決まりのマレー語での自己紹介。メンバーの中には初海外の団員も多い。貪欲にいろんなことを吸収して帰ってくるぞ!! 少々不安と大いなる期待を抱いて、いざ出発!! このあと、メンバーは韓国・ソウルを経由しマレーシア・クアラルンプールへ…。

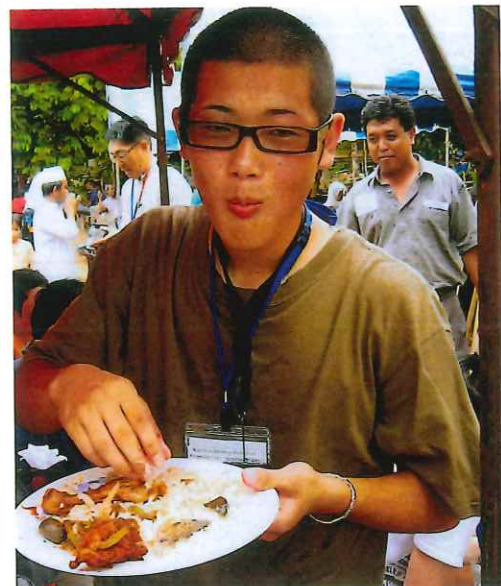
7月20日 火

●●● 首都クアラルンプールからトレンガヌ州へ



クアラルンプールを離陸して約50分。トレンガヌ州に近づいてきた。飛行機から下を見るとジャングルだらけ…その中を黄土色の川が流れている。日本では見られない景色だ。トレンガヌ空港に降り立った感想は「広い、広い、広～い」。まわりに何も無いのです。チャブ村へ移動するバスの中からゴムの木が伐採された後やパームヤシプランテーションを横目に、この後のホストファミリーとの出会いに胸が高鳴る…。

●●● チャブ村へ到着、そしてホストファミリーとのご対面



チャブ村に着いてあまりの人の多さと歓迎の手厚さに感激しっぱなし。全村民275名が村の広場でお出迎え。人生においてこんなに歓迎されることは今後ないだろう…というぐらい!!ココナッツジュースとブンガ・トゥローと呼ばれるゆで卵の付いた花をもらって、ホストファミリーとご対面。早速、昼食会では右手を使って食べてみるけど、これがなかなか難しい…。マレーシア人はみんな器用だなあ～。



7月 21 水



トレンガヌで活躍する青年海外協力隊の活動様子を視察



トレンガヌで活動している2人の青年海外協力隊を訪ねました。1人目は、養護学校で教師をされている来間寿史さん。ここでは障害児のみんなと訓練の一環としている「ろうけつ染」を体験。児玉さん「Susah(スサー)」「(難しいよ〜)」を連発。続いて2人目は、小学校の養護学級を担当されている伊藤愛さん。日本の教育テレビでの子供用音楽を使っているのにビックリ!! 来間さんも伊藤さんもマレー語を自由自在に話し、子どもたちとの信頼関係もばっちり。そして何と言っても目がキラキラと輝き、イキイキと活動している姿が印象的でした。将来、こんなふうになれたらなあ。夢がまた大きく膨らむひと時でした。

チャプ村での手作り運動会



村に戻ると手作り運動会の始まりです。左上の写真は椰子の葉っぱに座り、それを引っ張って走る競争。同行者の村岡さんだっってこんなに大喜び。右上の写真は、水の入ったバケツを頭の上ののせて歩くリレー。重いし、水はこぼれるのでバランスを保つのが難しくって…。他にも椰子の実(ココナッツ)削り競争やココナッツの実の殻を使った「かんぼっくり」競争、3つのレンガブロックだけを使って、それを組み合わせてその上を歩くレンガリレーなどなど。少しもお金がかかっていないのに、こんなに楽しい運動会ができるなんて。今の日本では物があふれすぎていて、思いつきもしないことだらけ。でもチャプ村では、物がなくなっただけみんな幸せに生活している様子がひしひしと伝わってきました。

7月22木

Matang 高校訪問



教師71人、生徒1200人規模の大きな高校を訪問。きれいで広い校舎にはコンピュータールームや寮も完備されていて、教育を受ける環境としては日本と変わらないようだ。一番驚いたのは校内に「歯医者」がいたこと。地元の学生たちと一緒に「ラサ・サヤン」を熱唱し、しばし会話を楽しんだ。みんな日本から来た私たちに興味津々の様子で「指差し会話帳」を見ながら交流を深めました。

地元の幼稚園訪問

幼稚園の子どもたちは本当に元気！幼い頃からサラム（マレー式の挨拶）をしっかりとできる子どもたちは偉い！！ここでは何かできることを・・・と幼稚園のペンキ塗りをみんなでやりました。暑い日差しの中、大変だったけど綺麗になりました。



ケニール湖 (Tasik Kenir) を見る



クアラトレンガヌの中心街から車で北へおよそ3時間。ここはトレンガヌ州のお隣、パハン州の淡水湖「ケニール湖」です。総面積700haのこの湖、今、植物が枯れつつあり、そのため湖の酸素含有量が減り、生息している魚の種類も激減しているようです。近くには日韓、共同建設のダムもありました。このダムのおかげで洪水による被害が減ったそうです。

マレー式模擬結婚式



そして大石さんと坂元さんはチャプ村でマレー式結婚式まで挙げちゃいました(笑)。2人とも照れ臭そうだったけど、衣裳がとっても似合っていました。他のメンバーは、村のみんなのために日本料理を振舞うべく、大きな鍋で天ぷらやすき焼き、唐揚げに味噌汁、おにぎりなどを準備。あっという間に食べ尽くされて日本料理はチャプ村で大好評でした。



7月 23 金

ホストファミリーと過ごした時間

朝はみんなで果物の王様ドリアンを取りに♪初ドリアンに挑戦した茅野さん。まずは、クククン。匂いをかいでみる。「うわぁ」匂いからして駄目だ! 勇気を振り絞って、最初のひと口。パクリ。「げえやばい!!!」どうやらお口に合わなかったみたい。



チャプ村の人々の足はバイク。こうやってサンドイッチ状態で毎日、学校に行っています。マレーシアは家から学校が遠かったり、誘拐事件が相次いでいたりということで親の送り迎えは日常茶飯事。左の写真は、チャプ村の中学生です。

団員の日記より

坂元 公枝

私のホストファミリーと明子ちゃん(児玉さん)のホストファミリーとで夜、屋台に行った。明子ちゃんは初めてらしく、とても感動していた。ポテトやサテ(日本でいう焼き鳥のようなもの)、ココナツシェイクを買ってもらった。そしてお姉ちゃんとお母さんからお土産としてヘアピンをもらった。これは大切にしたいと思う。明子ちゃんもすごく喜んでいて2人でお礼を言った。

茅野 瑞穂

今日は朝、ドリアン畑に行ってドリアンを初めて食べた。マレーシアに来る前は絶対食べなきゃなと思ってたけど、1回食べると、もう2度と食べないだろうな、と思った。味も匂いも全てヤバイ(≥_≤)

久保 佑允

うちのホストファミリーはプロレスが好きだったので、夜の時間はVCDをみながら過ごすことが多かった。折り紙を折ったり、写真を見たりすることも多かった。



マレーシア人はこのように床にごさを敷き、そこにたくさんのおかずを並べて、家族みなでご飯を食べます。白ご飯をよそおった皿の上にカレーや辛めの野菜やおかずをのせて右手でよくかき混ぜます。そして小指以外の指でひと口分を固めて、上手に口に運んだ後、親指を使ってうまく口の中に押し込むのです。手で食べるとおいしく感じるのは気のせい?!

バティック工場見学



クアラトレンガヌ市内のバティック工場を見学に行った。本当はお休みなのに製作過程(ろうけつ染)を見せてくれました。下絵も何も無いところに柄を書いていく。すごい才能!! ここトレンガヌはバティックの生産でも有名な所。メンバーもここで気に入りのバティックを買っちゃいました。

●●●● ホストファミリーや村の人たちとのお別れパーティー



歓迎式のあった村の広場に全村民が集まりお別れパーティーが開かれました。私たちはこの日のために練習してきた、空手や日本舞踊、弓道にダンス、リコーダーなど感謝の意を込めて、チャブ村のみんなの前で披露しました。そしてもちろん締めは久保リーダーによる「ハッスル、ハッスル」。お別れパーティーは夜も引き続き行われ、今度はチャブ村のみんなが輪になって座り、「ディキール・バラット」と呼ばれる伝統的な歌に合わせて手拍子でリズムをとる出し物を披露してくれました。私たちも浴衣で飛び入り参加し、一緒にリズムを叩いた時、チャブ村のみんなと私たちがひとつになれた気がしました。

ディキール・バラット
 で使った太鼓のよ様なもの



7月 24 土

●●●● ホストファミリーとの別れの朝



とうとうこの時がきてしまった。昨日の夜、家族にマレー語で手紙を読むと涙を流しながら聞いてくれた。この4日間は今、思うととても早かった。ホストファミリーと過ごした時間がすごく貴重で、別れるのがとても悲しい。私たちのステイ中、村の広場にずっと飾ってあった旗に一人ひとりサインをして、最後は歌を歌って、村人全員と握手をして再会を誓った。「Jumpa lagi (ジュンパ・ラギ)！」(また会おうね) そう言ってバスへと乗り込んだ。涙っぱいの目にいつまでも手を振りつつけているチャブ村のみんながにじんで見えた…。

おはら祭り in マラッカ



トレンガヌを後にした私たちは空路、クアラルンプールへ。そしておはら祭りの開催地であるマラッカ市へバスで移動。到着すると、休む暇もなく会場へ。この日のために鹿児島からは100名を超える踊り連がマレーシアに来ていて、ミニおはら祭りと言った感じでした。ここでもソーラン節を披露し、結構うけていたようです。

7月25日

クアラルンプールでJICA・JOCV関係者との夕食会



クアラルンプール市内のホテルにて懇親会。短い時間だったけれどマレーシアに関する裏話やこの国ではいろいろな民族、宗教が微妙なバランスで保たれているという話を聞くことができました。これから、このマレーシアという国がどのように成長していくかすごく興味深いところ。協力隊として障害者の水泳コーチをされている峰村さんは、パラリンピックでアテネに行くそうです!! すごいなあ。マレーシアの鹿児島県人会長 坂元さんも出席していただきました。(後列右から4人目)

7月 26 月

●●●● 鹿児島空港へ到着(解団式)



帰ってきてしまった…。また、ここから生まれればいいのに…そんな声も聞こえてきました。このメンバーとお別れだと思つと悲しい。まだまだ、みんなと一緒にいたい。この夏、私たちは大きく変わりました。またこのメンバーで絶対にチャブ村に戻るぞ!! みんなが同じ気持ちで帰宅の途につきました。

7月 30 金

●●●● 県教育長帰国表敬訪問



去る7月30日、月の団長と9人の団員が福元紘鹿児島県教育長を表敬訪問しました。まず団員全員がマレーシアでの所感を述べた後、久保リーダーから教育長へお土産が手渡されました。そして久保リーダーの提案で教育長とマレー式の挨拶(サラム)が実現しました。教育長からは「みなさんが10代という若いうちに素晴らしい体験をされたことがうらやましいです。しかし、みなさんが得たものは縁日の水風船と同じで空気を入れ続けなければ、いつかはしぼんでしまいます。頑張って空気を入れ続けてください」との言葉をいただきました。

KYT鹿児島讀賣テレビ ～ニュース プラス1～



教育長訪問を終えるとKYT鹿児島讀賣テレビへ。この日は「僕らのマレーシア日記」放映の最終日。(マレーシアでの様子が特集として3日間にわたって夕方方のニュースで放映されました)内田アナウンサー(同行記者)の計らいでメンバー9人が生出演。本番前のリハーサルから既にみんな緊張しています。仕事の中の内田さん、こうやってみるとやはりプロですね。

8月 7 土

帰国報告会 ～かごしま市民福祉プラザ～



帰国2週間後、「一生忘れない体験。チャブ村を訪ねて」というタイトルで帰国報告会を開きました。報告会では団員の体験したことを中心にマレーシア特有の果物のクイズやマレーシアのお菓子試食会、マラッカおはら祭りのビデオテープ鑑賞、団員によるソーラン節の披露etc…報告会に駆けつけてくださったみなさんにマレーシアで得たもの、そして、これからの自分の抱負を聞いてもらいました。自分たちなりに工夫した報告会ができました。

「マレーシア体験で、考えたこと」



私は高校最後の今夏、青少年国際協力体験事業に参加させていただいた。今回の派遣先は東南アジアの国々でも経済的に発展しているマレーシア。首都はクアラルンプール。東南アジアで1位の高さを誇るペトロナス・ツインタワーも有する。事前研修などで、事前にマレーシアの知識や言葉については少しの知識を蓄えてはいたが、正直、初の海外ということと英語圏ではないということで少しの不安があった。

7月20日に今回のステイ先であるチャプ村に着いた。全村民275人の手厚い歓迎を受け、不安も無くなりこの日からチャプ村での4泊5日のホームステイが始まった。

ステイ中、いくつかの施設や学校を訪問した。最初に訪れたのは養護施設。日本では町の郊外に作られがちであるが、このPDK Marangといわれる養護施設は交通量の多い道路に面していた。ここでは、その施設にいる生徒と共に幾つかの創作活動もさせていただいた。雰囲気はとても明るくて和やかで、偏見のようなものを私は感じる事がなかった。青年海外協力隊で作業療法士として活躍されている来間さんは、マレーシアにもやはり障害者に対する偏見があると言われていた。だが、その偏見とは日本のそれとは異なるのではないかと私は感じた。上手く表現することはできないが、日本とマレーシアの障害者に対する「養護」という言葉の概念は違うと感じた。この施設の先生方は障害者を後ろからリードするだけでなく、先頭にたってリードしていくことも多いという。それによって、保守的にならず、様々な経験をして社会へ適応していくのだろうと私は判断させていただいた。

続いて、マレーシアの高校を訪問して、お話を伺い驚いたのは、すべての学校では無いらしいが、生徒の学校における仕事で、制服のシャツの色が違うということ。図書部なら黄色、生徒会は白という具合に。一人ひとりに仕事の意識付けをするというねらいがあると聞いたが、日本の学校もそういう風にすれば学校の中が活性化していくのではないかと思った。学校の中を見学させていただいたが、敷地内に寮も完備されており、コンピューター

久保 佑 允

鹿児島第一高等学校 3年

ールームもあった。日本の学校の設備とさして変わりは無かったが、一番驚いたのが、学校の中に歯医者があったということ。マレーシアならではの事なのだろうか。

チャプ村でのホームステイでは、本当にホストファミリーや村の人々に優しく接していただいた。イスラム教を信仰しているため、食物や生活の面において日本と違いがあるが、それも何の抵抗もなく受け入れることができた。村での生活において、私はマレーシアの人々は絆が強いと感じた。家族はもちろんのこと、村という一つのコミュニティにおいてもそうであると感じた。まるで村が一つの家族なんじゃないかという雰囲気すら感じられるほどであった。何世代もの人間が同じ家に住むということも多い。それ故に、日本では避けられがちな高齢者の世話も家族で協力して行う。現在、日本は高齢社会であるが、その辺りの対策については国家予算が膨れていくだけの状態である。マレーシアや東南アジアの国々は先端技術の面において、日本から様々なことを学んでいるが、私たち日本は、この絆という面において、マレーシアや発展途上国と呼ばれる国々から学ばなければならぬと感じた。日本が戦後の高度経済成長などで無くしてしまった気質がマレーシアにはあった。私が祖父母から聞いた“昔の日本”がそこにはあったような気がした。

私はこの体験事業に参加させていただき、本当に良かったと心から感じている。人種、言語や宗教が違っても同じ地球人ということも強く意識することができたし、日本に帰ってきて1週間が経過しようとしているが、日本のどんな小さなことでもマレーシアと比べてしまう自分がいる。それだけ、この体験事業が自分に与えた影響が大きかった。日本を立つ前に「自分たちが経験することも大事だが、それを様々な世代の人に伝えるのも大事」と言われた。その事が今はよく理解できるし、それも実践していかないとけないなという思いが自然に起こってくる。これからもこのような交流が続いて、お互いの国の理解を深めていけたらな、と強く感じた。今度は私たちが迎え入れる番であると思うが、もしその時が来たら胸をはって歓迎できる人間になりたいし、今よりもっと外国人に理解のある日本社会を作っていけるような人間になりたいと思う。

最後になりましたが、私がこの体験事業に参加するにあたりお世話になった全ての人々に感謝いたします。ありがとうございました。

「ホームステイ in カンポン・チャブ」



(本人：後列左端)

最初から結論を言うが、僕はこの体験事業に参加して本当に良かったと思っている。多分、参加した9人全員がそう思っていると思う。

この体験事業に応募した時、僕はマレーシアという国をあまり意識していなかった。「まあ東南アジアの国の一つに行くのか」と思うくらいでほかには何も考えていなかった。「この体験事業が終わってマレーシアを離れる時、帰りたくない、また絶対戻ってくる、などとおもうでしょうかねえ」。ソウルからクアラルンプールに行く途中の飛行機の中で久保先輩と話していたことだ。先輩も「さあ、どうだろうね」と言っていた。

飛行機の中から見たクアラルンプールの夜景や空港から出たときに感じたものなど印象に残っているものは多々あるが、一番衝撃を受けたのが、チャブ村の人たちの歓迎だった。長い移動時間でつかれていた僕たちは「着きました」というガイドの声を聞き、ハッと外を見た。すると小さな広場に村の人たち大勢が集まっていた。バスから降りると、全員に華と椰子の実のジュースが手渡され、民族音楽が鳴り響く中を村の人たちに囲まれ、僕たちは広場の真ん中にある舞台に向かって歩いた。あまりにもいきなりだったから、あまり深く考えることが出来なかったが、舞台の椅子に座って落ち着くと、今、自分はマレーシアにいるんだという実感が湧いてきて、少し身震いをした。

大石 真教

鹿兒島第一高等学校 2年

この日から始まった村での生活は、何もかもが新しく、見るもの、聞くものすべてに衝撃を受けた。食にしても手づかみで食べるし、米も違う。もちろん料理は日本では見たことのないものばかりだった。最初は慣れなかったが、帰る頃になると日本で食べているものよりもおいしいような気がしてきた。チャブ村に滞在している間、いろいろな施設を見て回った。その中で一番印象に残っているのは、障害のある子どもたちのいる施設だった。障害と言えば日本では、どうしても可哀相だな、などと思ってしまう。しかし、ここは違った。みんな本当に楽しそうに暮らしていた。

マレーシアにいる間、いろいろな所に行っているなことをした。そのなかで一番楽しかったのは、チャブ村のみんなと話したり、遊んだりしている時だった。縁側のような所に座って話をしていると、必ず誰かが庭になっているフルーツをもぎ取ってきて、食べながら話す。こんな生活を今まで日本でしたことがなかった。あの村では、時間がとてもゆっくり流れている。僕が生まれるずっと前から、みんなああやって暮らしてきた。今、僕たちがこうやって忙しい毎日を送っている間も、向こうではあの時のようにゆっくり時間が過ぎていっている。

最近、チャブ村のことばかり考えている。また、あの村に行くことができれば、あの時のままでいてくれるかな。

「日本とマレーシアの文化の違い」



私が最も興味を持ったのは、日本とマレーシアの文化の違いです。特に、衣・食に関しては大きな違いが見られたと思います。

私は、マレーシアの人々はいつも民族衣装を着ていると思っていました。しかし、よくきているを見かけたのは40歳以上の女性の方ばかりでした。男性に関しては、ほとんど見られませんでした。

左の写真は、私が民族衣装、バジュ・クロンを着た時のものです。長いスカートと長袖から成っています。スカートが長いので動きづらく、裾を上げないと動き回るのも大変でした。村の女性が着ているバジュ・クロンは、一つも同じ色がなく、鮮やかでした。

マレーシアでは、宗教上、左手は不浄の手とされているため、右手でご飯とおかずを混ぜて食べます。私も挑戦してみましたが、ご飯がパサパサしているため、すぐにこぼれてしまい、うまく口に運ぶことができませんでした。

マレーシア料理で一番、特徴的なのは、辛いということです。唐辛子の入ったものもありました。辛い料理は少々得意だった私も、さすがに食べられない物もありました。

それとは逆に、飲み物はとても甘かったです。飲み物にかなりの砂糖を入れるため、高齢者に糖尿病が増えているそうです。

そして、マレーシアと言えば、何ととってもフル

坂元 公枝

国分高等学校 1年

ーツ。村の方々は農業をしているそうなので辺りを見渡せば珍しいフルーツがなっています。



上の写真で私が持っているのはドリアン。他にも、マンゴスチン、マンゴー、ランブータンなど色や形の変ったフルーツが、たくさんありました。

このように、同じアジアでも文化が異なっているということが、様々な体験を通してわかりました。お互いの文化を理解し、認め合うことが国際交流に大切なことだと思います。

「一生忘れない体験」

茅野 瑞穂

枕崎高等学校 1年



(本人：右から3人目)

私は、7月19日から26日の1週間で一生忘れない体験をすることができました。

マレーシアへ出発する前は、生活習慣の面、食事の面、言葉の面など本当に不安なことがたくさんありました。それに私は、ホームステイ先で少し体調を崩してしまい、ステイ先の家族や一緒に行ったメンバーにたくさん迷惑をかけてしまったと思います。でも、みんながどんな時でも笑顔で私と接してくれて、マレーシアに来る前まで張っていた緊張の糸が村のみなさんの表情と、一緒に行ったメンバーの表情を見ているうちにプツリと切れました。

また、私たちはマレーシアにいる青年海外協力隊の方々の活動も視察させていただきました。協力隊の方々は、文化も言葉も違う土地で不安も多いはずなのに、みなさんいきいきと活動されていました。自分たちとは全然違ってマレーシア人のように言葉も上手で、自分の仕事に誇りを持っているように見え、私としてはすごく格好よく感じました。

マレーシアは私にとって初の海外でしたが、何一つ不自由することなく、何も困ることもなく生活できました。マレーシアでは、一つ一つのことに驚きの連続だったけれど、本当に一番驚き嬉しかったことは、ステイ先であるチャプ村の皆さんの優しさでした。

私たちがチャプ村へ一歩足を踏み入れた瞬間から大歓迎を受けました。日常生活の上でも、いつも私のことを気にかけて「大丈夫だよ。何も心配いらないよ」と言ってくれたので、本当に安心して毎日生活できました。こんなにも私の存在を大切にしてくれて「もうずっとマレーシアに住もうよ」とまで言ってくれた時は本当に嬉しかったです。言葉もあまり通じない日本の高校生が、いきなり訪れ、そして4泊もホームステイをさせていただき、たくさんの迷惑をかけてしまったはずなのに、お別れの時に帰らないでと言って涙を流して見送ってくれました。その姿を見て「この村に来ることができて本当に良かった」と感じました。

ホームステイさせていただいたチャプ村のみなさん、そしてこんな貴重な体験を与えてくださった実行委員会のみなさん、支援してくださった枕崎市の方々、日本から「いってらっしゃい」と送り出してくれた家族、そして何よりも一緒にマレーシアへ行って、一緒にこの貴重な時間を過ごし、たくさんの思い出を作って良き仲間となれた8人の団員と、日本を出てからずっと私たちのそばについてくださった同行者の方々には本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

この体験は、これから先の将来を選択していくうえで絶対に役に立つと思います。

本当にありがとうございました。



「いつまでも優しさを感じられる私で」



慣れない長旅のせいか、バスの中で眠ってしまっていた。私はチャプ村の人々が奏でる音楽で目が覚めた。バスを降りるとあまりの歓迎ぶりに驚かされた。と同時にやはり、そこは異国の雰囲気満点で、クアラルンプールの都会ぶりを見た後ということもあってか「大丈夫だろうか」と不安を覚えた。すぐに「こういう状況下での体験を目的に自分から参加したのではないかと自分を奮い立たせたが、今振り返るとそんな不安も努力も無用であった。5日間、思っていた以上に言葉は通じなかったが、特にトラブルもなく楽しい思い出ばかりだ。もちろんそれは同行してくれた方々や協力隊の方々によるところが大きい。大変感謝している。今回は本当にたくさんの優しさを肌で感じた旅だった。

村ではたくさんのプログラムが用意されていて、ハードスケジュールだった。運動会ではココナッツの殻に乗って走ったり、椰子の葉に子供が座り、親がそれを引いて走ったりと現地ならではの競技を楽しんだ。私たちのために、この手作りの運動会を準備してくれていたことがとってもうれしかった。日本語でKiroroの「未来へ」を歌ってくれた時、家に帰ってスーツケースの上に現地で仲よくなった子からの手紙が乗っていた時など、思わず涙ぐんでしまうような場面もたくさんあった。そうでなくても、普段の生活の中で特にホストファミリーの優しさにどれだけ助けられたことか。言葉が通じない

山口 美穂

池田高等学校 1年

分、逆にその重みが増えたのかも知れない。別れの日、目にいっぱい涙をためて見送ってくれた彼らは、もはや私の大切な家族である。村を離れるころには、私たち高校生の間では「マレーシアの人々は優しい!日本とは全然違う!」という会話をよくした。私たちの素直な感想だ。

外から日本を眺めてみて、まるで日本では時計の針が早く進むかのように感じた。慌しい日常生活の中でたしかに日本人は「優しさ」を忘れかけているところがあると思う。村の人々によってそのことに気づかされた。しかし、私は今、私自身もまたその1人であり、日本では優しさに対する感度が鈍くなっていたのではないかとも考えている。日本にだって優しさはあるだろうに私がそれに気づけなくなってしまっているのではないかと。今回は今まで名前も顔も知らなかったメンバーと共に1週間を過ごした。そこには適度な緊張感があり、いい意味でいつもと違う私でいられたように思う。メンバーのおかげで私の中の優しさに気づく心を発見できたように思う。みんなから得たものも大きく、ありがとうと心から言いたい。私は、今回の旅でたくさんの方から頂いた優しさをいつまでも忘れることなく、自分の成長の糧としていきたいと思う。

チャプ村に到着し暖かい歓迎を受けたとき私は自分たちへの強い期待を感じ、ふいに「この人たちのためにこの5日間でなにができるだろう」と思った。おそらく私は何もできていない。村でうけた優しさの半分もお返しできていないだろう。これからもっとマレーシアやマレー語について勉強して、いつの日か再びチャプ村へ帰り、トゥリマカシ以外の言葉で感謝の気持ちを伝えたいと思う。

「人生変えちゃう夏かもね」

児玉 明子

甲南高等学校 2年



(本人：右から3人目)

7月19日、私は8人の個性溢れすぎるメンバーと共に、マレーシアへと旅立った。

「600選(県内の高校生のバイブル的存在である英語の重要短文集)持ってくれば良かった!」マレーシアにきてこんな台詞が出てくるとは夢にも思わなかった。英語は世界共通語。このことを、ホームステイ1日目にして思い知らされる出来事があった。

夜9時を過ぎた頃、近所の男の子達がバイクで私のステイ先へとやってきた(もちろんノーヘルである)。私のステイ先には18歳と26歳のお兄ちゃんがいた。どうやら毎晩こんな感じらしい。マレー式のチェスのようなものをやったり、雑談(マレー語なのでよくわからない)をしたり。しばらくすると男の子たちが私に話しかけてきた。英語である。多少、訛りらしきものはあるものの流暢な英語だ。私は拙い英語とマレー語で必死に話しをしながら驚愕の事実を知った。マレーシアでは幼稚園から英語を教えるらしい。さらにマレー人=イスラム教徒なので、コーランを読めるようになるためにアラビア語も勉強するらしい。幼稚園から。信じられなかった。こんな言い方は失礼なのだろうけど、発展途上国の、田舎の州の、田舎の村の人たちだって外国人とほとんど何の問題もなく「英語」でコミュニケーションを図れる。日本はどうだろうか。因みに私はマレー語はもち

ろん、英語の方も散々たるものだった。このことは私にとって衝撃的な出来事だった。6年間も一体何をやっていたのだろう・・・恥ずかしかった。英語に力を入れよう。私はそう決意した。

そんなこんなで別れの日がやってきてしまった。別れの時、みんなで円になって一人ひとりと握手した。最初は笑顔で握手をしていたが、そのうちポタポタと涙がこぼれてきた。「どうしよう。これじゃまんまウルルン滞在記だよ。」などしようもないことを考えながら、必死で涙をこらえようとしたが無理だった。こんなに悲しいのに、こんなに温かい気持ちで泣いたのは初めてだった。お父さん、お母さん、お兄ちゃん、うちによく来た男の子たち・・・チャプ村の人たちはみんな温かくて優しかった。日本人が忘れかけているものってこういうものなのだろうなあ、泣きすぎてボーッとした頭の中で思った。

今回の旅で、私は多くの貴重な経験をすることができた。最終日の食事会に出席して下さったマレーシア鹿児島県人会の方は、同じ高校の卒業生だと聞いて「世界は狭い」と、身を持って実感したりもした。そして、将来の夢をここで見つけることもできた。

一緒にホームステイをしてくれた青年海外協力隊の来間さんは、ことあるごとに「日本に帰ったら勉強しなきゃね」と言っていた。来間さん、私、頑張りますよ。そして絶対に来間さんの後輩として協力隊員になりますから。



「マレーシアを訪ねて」

川畑 知穂

開陽高等学校 2年



私にとって今回の旅は、初海外旅行であり、初ホームステイであり……と「初めて」がたくさんの旅でした。ホームステイ先へ向かうバスの中、私の不安は頂点に達していました。

しかし、私の不安は村に到着すると同時にすぐ消えてしまいました。最初に村の方々の歓迎が盛大で、その歓迎に驚いて不安が消えていきました。次にホストファミリーの方々と対面して、その優しさに触れて安心して不安が解けていくのを感じました。

ホームステイ中は、拙いマレー語と英語で会話とも呼べないような会話をして色々なことを伝えようとしました。初めのうちは互いのことがよくわからず、言葉も伝わらなく、自分のことを伝える難しさを知りました。でも、言葉がだめなら「笑顔」で話す！身振り手振りでわかってもらえるように！ということに心掛けて接していきました。すると、1日目には硬かった表情が2日目には1つ笑顔が増え、3日目にはすっかり打ち解け、4日目にはみんなで川に行って泳ぎ(水浴びを)しました。その頃には言葉の壁がすっかりなくなっていました。言葉の伝達能力は変わってはいないと思いますが、確実に相手に言いたいことが伝わるようになってきていました。

同じ歳の「アー」や大学生の「ノーニン」と学校のこと、家族のこと、日本や鹿児島のこと、本当にいろいろなことを話しました。5歳の双子の女の

子「シャヒダ」と「シャヒラ」、8歳の「シャヒクア」。とてもかわいい笑顔でよくなつてくれて嬉しかったです。無口だけど優しいお父さん、優しい笑顔でしっかり者のお母さん、よく話しかけてくれたお兄ちゃん。この家族にたくさんの「楽しいこと」を教えてもらいました。

お別れの前日にお兄ちゃんから散々「明日、泣くな」と言われていたけど無理でした。まだまだ、マレーシアに残りたくて、離れたくなくて、絶対にまた戻ってくると心に誓いました。

ホストファミリーとの交流のほか、近くの小学校や養護学校の訪問、高校生との交流、と心に残る出来事がたくさんあって、ここには書ききれません。そのなかでも、現地の青年海外協力隊の活動している現場を見て、とても笑顔が輝いていたこと、活動をしながら、とても楽しんでいて地域の方々に親しまれていたことなどが心に残りました。ますます青年海外協力隊に対する憧れが募り、将来、絶対に協力隊になって、できればマレーシアで活動したいと思いました。

最後に、本当にこのような素晴らしい事業に参加させていただき、ありがとうございました。この事業に参加できて心から嬉しく思っています。この事業では、マレー人との出会いもありましたが、大切な友だちとの出会いもありました。この9名の団員と4名の同行者の方々とマレーシアに行けたことを絶対に、絶対に忘れません。

「日本とは違うマレーシアの発見」

木佐貫 かおる

鹿児島女子高等学校 2年



まず初めに、一番大きな違いを感じた事は、宗教が日常生活に深く関わっている事だった。日本の宗教といえばたいていは仏教や神道だが、それほど日常生活と深く関わりあっているとは思えない。しかし、マレーシアではイスラム教が日常生活に深く関わりをもっている。例えば、豚肉を食べない、お酒を飲まない、コーランを読むなど、日常生活の中心にイスラム教が関わっていた。そのため私達は、現地で日本料理を作るのにお酒や豚肉を使わないものを選んで行った。

また、学校制度の違いも大きいことが分かった。日本では中高あわせて6か年だが、マレーでは中高あわせて5か年となっている。英語は小学校1年から習っていて、日本よりも英語教育に熱心に取り組んでいるようだった。さらに、学校へは親が迎えに来ていた。なぜなのだろうと思い、聞いてみた。すると、子供がさらわれる事件が相次いであったために親が迎えに来たり、家が遠いために迎えに来ているのだということだった。日本との違いがあまりにも多かったため、私達は驚いてばかりだった。

ところで、私達が行った村、チャプ村は、村の団結力がとても強い村だという印象を受けた。村の人は、よく集会所のようなところでみんなで話をしたり、くつろいでいたりしていて、とても仲が良かった。私の住んでいる地域ではこんなに団結力は持っていないと思う。私も隣に住んでいる人

のことをあまりよくは知らない。だから、この様子を見て、『本当にいい村なんだなあ』と、感心してしまった。それに、最初はそんなに話しかけてくれなかったけれど、笑顔で話しかけると、村の人も笑顔で返してくれた。ここでは自然と笑顔が出てきてしまう。何もかもが新鮮で、不安さえも吹き飛ばしていた。ここに来て本当によかったと思った。

ホストファミリーも、とても優しい方々だった。一生懸命、私に伝えようとしてくれて、私も精一杯マレー語やジェスチャーを使って答えた。そのやりとりは、家族にも伝わっていたのか、私に会話帳とジェスチャーを使って話しかけてくれた。とても嬉しい出来事だった。「これは日本語でなんて言うの?」と聞かれた時は、私と話したい、という気持ちが伝わってきて自然と笑顔がこぼれた。

今までのマレーシアは私にとって東南アジアの国の1つにすぎなかった。しかし、今ではホストファミリーのいる第二の故郷になり、大好きな国へと変わった。単なる海外旅行ではなかなか体験する事ができない現地の方々との交流や子供達との交流はとても新鮮だった。

今回の国際協力体験事業での体験全てが、私にとって感動的なものだった。またいつかマレーシアを訪ねて、もっと日本の事を紹介したりマレーシアのことを学んだりして積極的に国際交流を図っていきたい。

「私がミテ、カンジテ、エタモノ」



7月19日、私は飛行機の中で微妙な時差1時間で、すでに疲れていました。

しかし着陸約十数分前、一生忘れられないようなクアランプールの美しい夜景が飛行機から見えました。鹿児島とは、まったく比べものにならないぐらいのネオンの数、予想もしていませんでした。ホテルに向かうバスの中でも、私は興奮していましたが、複雑な思いにもなりました。目の前にあるのは、高層マンション、開発途中のニュータウン、そして多くのライト。もし本当にこの国が開発途上国とするなら、地方の暮らしはどうなっているのだろう…。貧富の差…この言葉を考えずには、いられなくなりました。ホテルの裏や細い通りは暗く、「おもて」の近代的な様子とはだいぶ違いました。そして、滞在先のトレンガヌに着いた時にも、この最初の印象のせいか、その空港から見えた景色が、殺風景な「裏」の様子にも感じてしまいました。

しかし実際、村に着くまでパームやしや天然ゴムの一面緑ばかりが続き、とても新鮮な光景でした。ガイドさんの「これから開拓されていこう。」という話を聞き、私は日本では見られない美しさの森や山がいつまでも残ってほしいという気持ちになっていました。

そして、そんなすばらしい自然の中に住む人々も、日本人の中に消えつつある、人間の温かさを持っていました。チャプ村でお世話になったホストファミリー、村のみんなのことはいつも思い出します。大人も子どもも会うと笑顔で「アカネツ」、と声を掛けてくれて、自分も毎日、心から笑顔で過ごせました。どの家にもいつも2、3家族が遊びに来ていて食事の時も笑いがたえなくてすごく賑やかで、私はその雰囲気大好きでした。

そのチャプ村で一生の思い出ができ、日本とマレーシア、言葉が通じなくても、お互い心を通じ合わせて、人の温かさを感じることができたのはとても幸せすぎる体験だったと思います。

今回、この事業の目的は村の人々との交流、そして

増留 愛香音

鹿児島東高等学校 3年

青年海外協力隊の実際の活動を見たり、お話を聞いたりして、自身で感じ、体験することでした。クアラトレンガヌで出会った5人の隊員の方々は、一人ひとりがいつも笑顔でいきいきと活動していました。その中の一人、小学校で養護学級を担当している伊藤愛さんは、子どもたちと一緒にとても楽しそうに歌ったり、踊ったりしていました。伊藤さんは、目が輝いていてこの活動に対する遣り甲斐が一目でわかりました。

そして、首都のクアランプールでは隊員の方々のお話を聞く機会がありました。障害者水泳、という職種で来ていらっしゃる峰村さんは今度アテネで行われるパラリンピックにマレーシア代表で出場する選手との合宿の真っ最中だそうです。イスラム色の強いこの国で、女性が肌を見せることは厳禁なので、最初は「なぜ女性を派遣したのか」という声もあったと聞き、宗教の厳しさの中に複雑なものを感じました。日本語教師としてマレーシアで十数年活動していらっしゃる楠元さんからは、多民族国家のこの国の現在のありかたについて聞くことができました。前から協力隊派遣のスポーツ部門や日本語教師に興味があったので、お話を聞いたことはとてもいい機会だったと思います。

私はこの事業に参加して今まで生きてきた17年間にはない、新たに得たもの、見つけたこと、気づいた事がたくさんありました。チャプ村の人々からは、言葉はなくても心は通じること、笑顔は何よりも大事なものだということを教わりました。そして、自分の知らなかった自分を見つけることができ、新たに自分への可能性を知ることのきっかけになった気がします。また、協力隊の皆さんを見て、今までにはなかった新しい将来への目標ができ、それに向かっていくこれからの自分の力になった気がします。

そして何よりも大きかったこと、今回マレーシアに行った8人(+4人の同行者の方々)の仲間に出会えたことです。一人ひとりの個性が強く、みんなから学んだこともたくさんあり、色々な場面で助けられました。この事業で集まるまでまったく知らなかったのに、今では一生の友達だと思っています。

今回、この体験事業に参加したのは、あとにも先にもこのメンバーです。そのことを忘れず、このマレーシアの体験をこれからの自分の道に活かし、またみんなとチャプ村に戻ってきたいです。

みんな本当に、Terima Kasih!

団長報告

「マレーシア・チャブ村から夢の実現への出発」

(財) 鹿児島県国際交流協会

専務理事 月野 健一



(本人：後列右端)

平成16年の夏に、鹿児島県青少年国際協力体験事業として、県内の高校生9名と共に総員13名で、鹿児島空港からマレーシアへ旅立ちました。

高校生が、国際交流を自分自身で直接体感することや、4泊5日のホームステイを通じて家族や地域社会との連携の姿を考えたり、青年海外協力隊の活動現場で、隊員の活動を体験したりと幅広い目的を持っての旅です。事前研修でマレーシアの歴史や言葉なども勉強しましたが、大いなる期待と少しの不安を抱きながら、飛行機は予定どおりクアラトレンガヌ空港へ着陸しました。同空港の周辺には高い山もなく、見渡す限り広い空が広がっていました。

バスに乗り換え、1時間程でチャブ村に着きましたが、全員が目にして驚いたのは村民を挙げての大歓迎でした。

民族音楽が演奏される中、村長から一人ずつに花飾りが渡され、ステージの上に案内されました。

こうして、鹿児島とマレーシアとの国際友好交流を深めるため、チャブ村での4泊5日のホームステイが始まりました。

チャブ村は、マレーシアの北部にある山間地域で、パームやしのプランテーションに囲まれた人口約300人の農村でした。

ホームステイを通して、団員達は言葉は十分に通じなくても笑顔で生活し、チャブ村の人々の親切さと優しさに触れることができ、人の温かさを感じられました。チャブ村の人々は、家族と一緒に生活しながら、強力な助け合いの気持ちで地域社会全体を支えているように見受けられ、現代の日本が見習うべきことと思いました。

また、物質面では豊富な日本であっても、チャブ村の毎日の生活の中で、本当の幸せとは何だろうと心の豊かさについて考えさせてくれました。

青年海外協力隊の活動現場では、隊員の皆さん方がしっかりと目的意識を持ち、生き生きとして活動されている姿を目の当たりにして、高校生達の瞳が一段と輝いているように見えたのは、私だけではなかったと思います。

今回の日程の中で、ホストファミリーとの団らんの時間が十分に確保できなかったこと、訪問先が多かったり次の訪問先までの移動時間が十分でなく少しあわただしい位であったことを反省点として挙げ、今後の事業に生かしていきたいと考えています。

この8日間で、いろいろな体験をし、たくさんの思い出を作ることができましたが、参加した13人全員がそれぞれに大事な宝物に出会い、いつまでも忘れることのないチャブ村での生活になりました。

そして、参加者のそれぞれの胸中に秘めた決意が芽生えており、暑かったチャブ村に負けない位の情熱を持って、今、参加者の一人一人が自分の夢の実現に向けて、チャブ村から出発しようとしています。

「同行者の目から見て」

青年海外協力隊鹿児島県OB会

西村 直人



鹿児島県青少年国際協力体験事業に参加させていただきありがとうございました。マレーシアの青年海外協力隊OBということでお声をかけて頂いたときには、十数年前の体験だっただけに少々不安もありましたが、事前研修からの団員の元気やパワーでそんな不安も吹っ飛んでしまいました。今回の事業では、地元でのスケジュール調整兼通訳という役割、そして何よりも高校生の団員がひとつでもひと時でも多くマレーシアや青年海外協力隊活動の体験ができるように、そんな立場を自覚し参加しました。

マレーシアではトレンガヌ州のチャプ村にて4泊のホームステイ、マレーシア初体験の地クアランプールからすると同じマレーシア?と疑いたくなるような緑豊かな村、村へ到着するなり村人総出の歓迎式、ホストファミリーとの対面、ホームステイが始まるまで言葉や生活習慣に慣れるか、不安でいっぱいだったでしょうが、村人やホストファミリーの暖かいもてなしの心や笑顔がそんな不安を取り除いてくれたようです。

団員の片言の英語や指差し会話帳片手のぎこちないマレー語でのコミュニケーション、そして何よりも身振り手振りで一生懸命何かを訴えているうちに言葉以上にお互いが納得できた体験、日本の文化皆さんの紹介できた踊りや楽器演奏、柔道弓道など)の披露や日本料理の紹介などの体験を通じて心からお互いの気持ちが分かり合

えたようで、日々たくましくなっていく団員の姿をうらやましく感じた次第です。コミュニケーションできたことで全く知らなかったマレーシアを知り、違う宗教の習慣や文化に触れ、一週間で世界観が変わったようです。体験することでしか味わえないものをこの一週間で教えてくれたはずです。

協力隊活動の視察では、養護隊員が笑顔を絶やさず、きらきら目を輝かせて言葉の壁を乗り越えて現地に溶け込んでいる姿に団員皆圧倒されました。ぜひあんな姿を自分も実現させたいと感じた団員も多かったはずです。

行く前は長いようでもあつという間だった今夏の一週間、一生の思い出になったはずです。ぜひこの体験を大切に、そしてこれからもっともっといろんな体験を積み上げてステップアップさせてください。そしていつの日か大きくなった自分を国際協力や国際交流の舞台に…。

最後にこの貴重な体験事業を支えてくださっている皆様に心より感謝申し上げます。

「青少年国際協力体験事業に同行して」

青年海外協力隊鹿児島県OB会

村岡 佐世子



今回、この体験事業へ同行するにあたり、高校生と一緒に行動することへの楽しみと皆が無事に帰ってこられますようにと祈る気持ちとがありました。協力隊時代にも農村でのホームステイは体験したことが無く、ある程度の環境下での生活は問題ないとは思っていましたが、団員および同行者の体調に加え、私自身が村での生活に適応できるかという不安を抱えての出発でした。しかし、今回同行という立場でしたが、団員達の適応力やこの短い旅の間にたくましくなった姿を目の当たりにし、また村でのゆったりと流れる時間や人々の優しさを感じる事が出来、私達にとっては非日常の日常を体験することで私の方がとても良い体験(勉強)をさせて頂いたと感謝しております。

マレーシアでの日々を振り返って見ますと、団員達の適応の早さに驚かされました。日本とは違う生活スタイルや宗教上の習慣も楽しみに変えているようでした。まったく言葉の壁を感じさせず、誰もがチャプ村での生活に溶け込んでいました。これもひとえに村の皆様やマレーシアで活動している青年海外協力隊の皆様のおかげで、他の同行者の皆様の細部にまで心を配った気遣いのおかげだと感じています。

村人達との交流を通して、人と人との交流は言葉だけでは無いということ、身をもって体験し、笑顔と笑顔、涙と涙、心と心が触れ合うことによ

ってたくさんのことを感じる事が出来たと思います。また相手の文化や宗教を理解し、それをととても大切にしていることを感じることで、平和の尊さや現在あちこちで起こっている紛争についてもより身近に感じ、自分なりの考えを整理する手助けになったことでしょう。

この事業に参加させていただき、団員および同行者の皆様とともに過ごした7泊8日はとても貴重な時間でした。実際の生活の中で現代の若者とともに長時間過ごせる時間は無く、テレビや新聞に登場するような若者像をイメージしていましたが、とてもたくましい、また素晴らしい考えを持っている子供達がいると知ることが出来たことを幸せに思います。また、団員達が現地で協力隊員と触れ合い、彼らの瞳が生き生きしていたと語るのを聞き、日本にいても子供達に恥ずかしくない生き方、仕事出来るように日々を送らねばと気持ちを新たにするとともに、今回の体験も何らかの形でお返ししていかなければと感じております。

最後になりましたが、今回の事業のためにご尽力くださいました関係者の皆様にご心より御礼申し上げます。ありがとうございました



「9人の高校生へ」

KYT鹿児島讀賣テレビ

内田直之



夕方のニュース終了後のミーティング。「マレーシアに取材で行きたい者は申し出るように!」上司から話があったとき、先輩たちを差し置いて真っ先に手を挙げました。「仕事で海外に行ける!」実を言うと、これが私の今回の事業参加の動機でした…。

出発1ヶ月前に行われた、第1回目の研修。今だから告白します。9人の学生をカメラで撮影しながら思ったこと。それは「大丈夫なのか?この子たちは。マレーシアでやっていけるのか…?」といったものでした。私が彼らに抱いた第一印象。それは良く言えば、しっかりしている。悪く言えば、妙に大人びていて子供らしくない。生真面目。いわゆる現代っ子、おとなしすぎるといったものだったからです。この子たちはマレーシアの田舎でのホームステイ生活に果たして耐えることができるのか?マレーシアでの様々な出来事に感動してくれるのかな?そんな心配でいっぱいでした。現場で「感動」がなければ視聴者が見て「感動」する作品を作ることはできません。ある意味、制作者としての冷やかな目で彼らを見ていたのかもしれませんが。後日、ものの見事に裏切られるのですが…。

マレーシアでのホームステイ。子供たちはマレーシアの家族からこれまで受けたこともない温かいもてなしを受け、あっという間に家族の一員になっていました。トイレやお風呂といった生活様式にもすぐに慣れていました。子供だからこそ成せる技でしょうか。もの凄い順応力です。人懐っこい現地の

子供たちの笑顔や日本が忘れかけている優しさ。子供たちがそうしたものを肌で感じながら生活をしたからこそ、別れの際の号泣があったのだと思います。感情むき出しの子供たちを見ていると私はつい、目頭が熱くなりました。この子たちは本当に素直で正直でまっすぐだな。私の彼らに抱いた第二印象でした。

マレーシアでの私の仕事。それは一週間という限られた時間で子供たちが、どのように成長していくのかカメラで記録していくことです。子供たちのちょっとした反応(現地での驚き、感動、戸惑いなど)を見逃すまい、取り逃がすまいと必死でした。1週間で撮影したテープは60分テープ×10本=10時間。カメラを持った右腕が腱鞘炎になるのかと思う瞬間もありました(笑)。子供たちに一番近い距離で彼らの活動を撮影したからこそ、自信を持つことができます。「高校生9人は間違いなく成長しました!」。先輩を気遣いおとなしかった子が日に日に表状が豊かになっていく。最初は現地の人との交流に戸惑っていた子が最終日にはマレー語で自信たっぷりに会話をしている。高校生のあまりの成長ぶりに現地では、ほんと感動しっぱなしでした。

アナウンサーという職業柄さまざまな人に出会います。言葉の通じない外国の人を取材することもあります。マレーシアでの取材活動は私にとっても貴重ないい勉強となりました。ありがとうございました。今後の糧としたいと思います。

最後に一緒に参加した高校生たちへ。学生時代にこんなにも素敵な体験をできた君たちを僕は心からうらやましく思います。一週間という短い期間でしたが、このマレーシアでの経験は一生の宝物。この貴重な経験を生かし、夢に向かって大きく大きく羽ばたいてください。応援しています。ありがとう。

【平成16年7月25日付 地元紙／中国報】

中国報
2004年7月25日 ☆星期日 今日馬六甲 C6

日本鹿兒島舞蹈 舞動人心 促進2地文化交流

■表演者配合輕柔的音樂舞動，給人十分舒服的感覺。

■快樂的歌唱、開心地演奏與拍打，表演者樂在其中。

■表演者不分年齡與男女，身上穿著的鮮艷和服讓人眼前一亮。

■一百一十八名來自日本鹿兒島的表演者，到來甲州出席第一屆馬六甲鹿兒島文化節。

（馬六甲廿四日訊）由甲州政府及馬六甲——日本鹿兒島友誼協會聯合主辦的「第一屆馬六甲鹿兒島文化節」，今日在漢都亞行人廣場舉行，讓古城市民有機會一睹日本傳統舞蹈。

一百一十八名來自日本鹿兒島的表演者，於傍晚時分，在封了一半的漢都亞路上，呈現著獨特的舞蹈。

這批年齡介乎十歲至七十多歲的男女表演者，穿著鮮艷奪目的日本和服或傳統服裝，隨著柔和的音樂有秩序地舞動，吸引公眾的目光。

甲州首席部長拿督斯里莫哈末阿里魯斯丹特地抽空出席觀賞表演，他蒞臨時即穿上主辦單位為他準備的日本傳統服裝，校後他受禮擊鼓一分鐘，代表著節目正式展開序幕。

表演活動從傍晚五時許，一直延續至晚上七時十五分。大會也安排了本地舞蹈員呈獻本地傳統舞蹈，作為兩地舞蹈文化的交流。

in result

1-7-2節



姉御肌アサカ

1-7-2節

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の概要

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

1 趣旨

鹿児島県の青少年を開発途上国に派遣し、その国づくりに貢献している青年海外協力隊員の活動現場の体験や現地での協力活動を行うことで、国際協力に対する理解を深めるとともにホームステイや学校、施設などでの交流を通して相互理解を深め、国際性豊かな人材を育成する。

また、派遣後は、これらの体験を報告会などを通して学校や地元に戻元し地域レベルでの国際化に寄与するものとする。

2 事業主体

主催：「鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会」

※構成団体：青年海外協力隊鹿児島県OB会

鹿児島県青年海外協力隊を支援する会

(財)鹿児島県国際交流協会

共催：鹿児島県内の関係市町村

後援：独立行政法人国際協力機構九州国際センター、鹿児島県、鹿児島県教育委員会

3 派遣先

派遣国はアジア諸国を対象とする（実績は別紙参照）

4 派遣者

参加者：県内各地から募集・選考した10～20名の中学生、高校生、専門学校生

同行者：実行委員会関係者と新聞社、テレビ局など報道関係者

共催市町村職員

5 実施時期

7月下旬～8月上旬の間の1週間程度

派遣の前後に事前研修会、報告会なども実施

8 経費

この事業の実施に要する経費は、実行委員会の構成団体、共催者（参加者に対する助成金による方法を含む）及び参加者が負担する。

鹿児島県青少年国際協力体験事業の実績

	派遣国(地域)	派遣期間	人数 (生徒数)	参加者の出身市町村	備考
第1回	マレーシア (コタキナバル・サリマ ンドゥ)	平成3年 3/27(水)～4/3(水) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市,阿久根市,名瀬市, 市来町,伊集院町,祁答院町, 内之浦町,佐多町	公募
第2回	マレーシア (クアラ Lumpur・ス ブランベラ)	平成4年 3/27(金)～4/3(金) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市,鹿屋市,大口市, 指宿市,隼人町	公募
第3回	マレーシア (クチン・テラガアイ ール)	平成5年 7/23(金)～7/30(金) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市,加世田市,三島村, 隼人町,菱刈町,霧島町	公募
第4回	インドネシア (バンドン・パシールカ リキ)	平成6年 8/1(月)～8/7(日) (6泊7日)	15名 (9)	鹿児島市,出水市,指宿市, 垂水市,菱刈町,霧島町	公募
第5回	マレーシア (コタバル)	平成7年 7/30(日)～8/6(日) (7泊8日)	16名 (10)	鹿児島市,国分市,頰娃町, 宮之城町,隼人町,吾平町, 根占町,中種子町	公募
第6回	マレーシア (タイブン・バリットム ントリー)	平成9年 7/27(日)～8/3(日) (7泊8日)	16名 (11)	鹿児島市,串木野市,東市来町, 伊集院町,郡山町,日吉町, 吹上町,金峰町	市町村 推薦
第7回	マレーシア (クチン・テラガアイ ール)	平成10年 7/26(日)～8/2(日) (7泊8日)	25名 (20)	鹿児島市,大口市,国分市, 菱刈町,始良町,蒲生町,溝辺町, 横川町,栗野町,吉松町,牧園町, 隼人町,福山町	市町村 推薦
第8回	タイ (アユタヤ・ルンカー オ)	平成11年 7/30(金)～8/5(木) (6泊7日)	14名 (9)	鹿児島市,指宿市,加世田市, 喜入町,笠沙町,知覧町	市町村 推薦
第9回	タイ (チェンマイ・メーカン ボン)	平成12年 7/24(日)～7/31(月) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市,鹿屋市,国分市, 垂水市,祁答院町,財部町, 末吉町,串良町	市町村 推薦
第10回	ベトナム (ホーチミン,フーホイ)	平成13年 7/20(金)～7/26(木) (6泊7日)	19名 (13)	鹿児島市,出水市,加世田市, 国分市,垂水市,祁答院町, 溝辺町	市町村 推薦
第11回	ベトナム (ホーチミン,タンビン)	平成14年 8/4(金)～8/10(木) (6泊7日)	17名 (11)	鹿児島市,串木野市,枕崎市, 国分市,垂水市,溝辺町	市町村 推薦
第12回	タイ (ナコンラチャシマー 県を予定していた)	平成15年 SARA及び鳥インフ ルエンザの影響によ り中止			

第13回 体験事業をふり返って

鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
事務局長 弓場 秋信

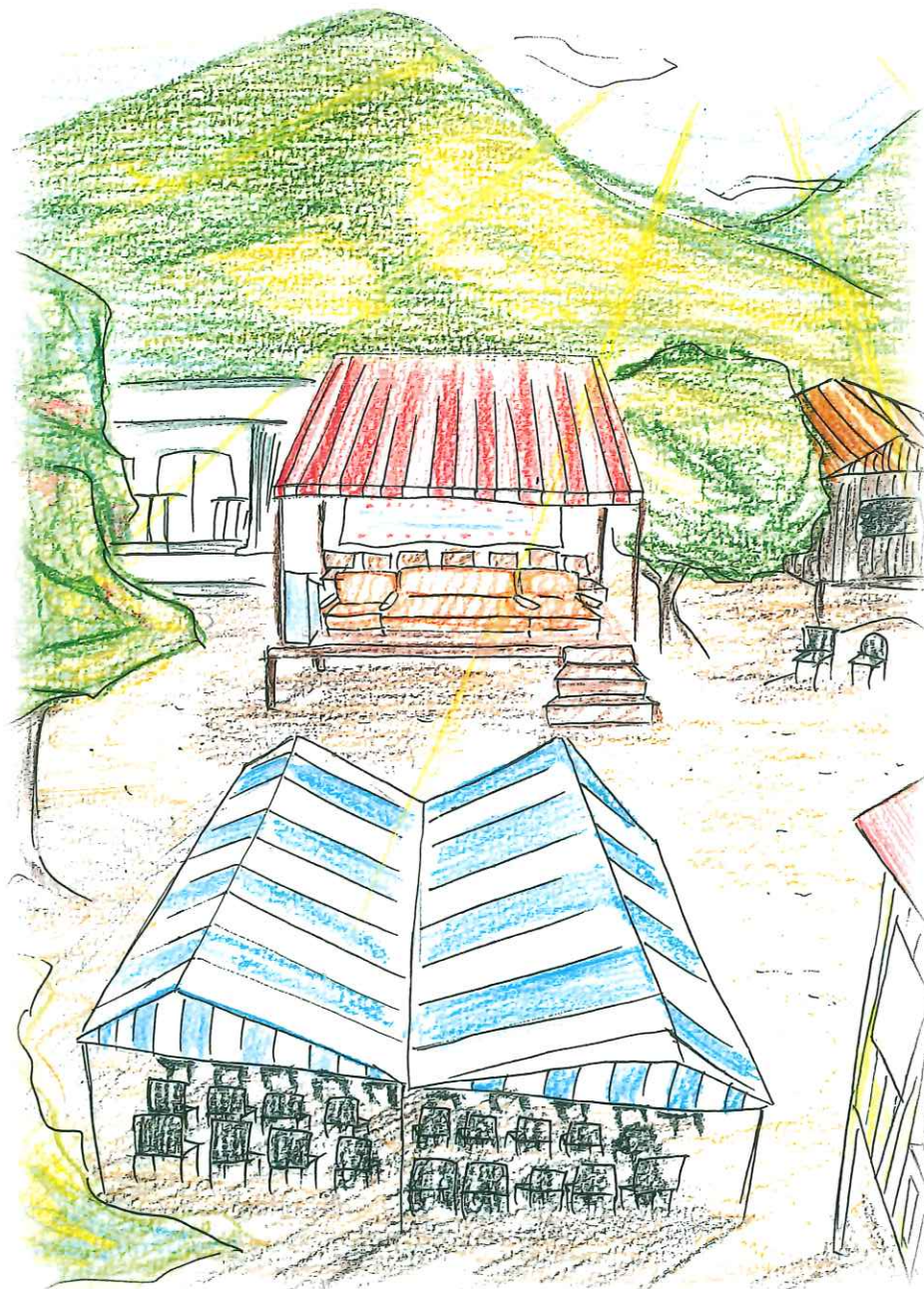
昨年(2020年)の第12回は、SARSと鳥インフルエンザの影響でタイ国への派遣を中止せざるを得なかった。そこで今年度はそれらの発生が最も低いと思われ、且つ実り有る異文化衝突・交流と青年海外協力隊の活動現場訪問が可能な国マレーシアでの実施とした。

マレーシアはマレー系、中国系、インド系が同居し、各民族は独自の言語・宗教・文化を有す複合民族国家である。過去の悲しい人種暴動事件を教訓とし、「ブミプトラ政策(マレー人優先政策)」で人種間の融合を図り「ルックイースト政策」の下「2020年に先進国の仲間入り」をスローガンに発展する東南アジアの優等生である。このような国でのホームステイや同世代との交流は、日本では得られない多くの刺激と視野の広がりが期待できる。

国内外から草の根の国際協力実践者として高い評価を受けている青年海外協力隊事業は、「日本青年海外協力隊」として1965年に発足した。以来80カ国に約25,600人の若者が参加し、鹿児島県からは500名が開発途上国の国づくり人づくりに汗を流している。この事業最初の派遣国マレーシアは、日本の国際協力の歴史やその成果・問題点について学ぶに相応しく多くの示唆を与えてくれるであろう。

国分市、鹿児島市、枕崎市からの6名と実行委員会推薦の3名を含む団員9名は2回の事前研修でマレー語とマレーシアや鹿児島について学習して本番に臨んだ。団員はマレーシア滞在中、イスラム教徒が住むクアラトレンガヌ州チャプ村でのホームステイ、協力隊員の活動現場訪問、学生との交流、派遣中協力隊員との懇談、文化交流、躍進著しい首都の見学など。結団式で緊張と不安げな顔を見せていた団員が帰国後「一日が24時間では短い」、「マレーシアには温かい家族がある」、「協力隊員は輝いていた」、「自分の進路を見つけた」など充実感あふれる顔で語った。団員がこの感激を忘れず目標を持って日々努力し、将来マレーシアを含むアジアの国々との架け橋として活躍する事を夢見ている。

第13回が所期の目的を達成しここに報告書が完成しましたのも各方面のご支援の賜物と感謝申し上げます。最後に温かくホームステイを受入れて頂いたチャプ村の人々と、活動中の協力隊員のご健勝を祈念申し上げます。



***チャプ村中央広場**

村人が手作りで準備した歓迎会、交流会などのための
舞台と会場。毎日ここに集まった。

〒892-0816 鹿児島市山下町14-50 かがしま県民交流センター1階 TEL099-221-6620 FAX099-221-6643

編集発行
鹿児島県青少年国際協力体験事業
実行委員会